

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	和崎 聖日
論文題目	ソ連解体以後のウズベキスタンにおける家族と相互扶助に関する人類学的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、旧ソ連・中央アジアのウズベキスタン共和国をフィールドとして、ソ連解体に起因した大きな社会変容、なかでも経済とジェンダーをめぐる変化が現地ウズベク人にどのように経験されているのかについて、社会・経済的な意味で中間層または下層に位置する「家族」の生活文化を通して、明らかにしたものである。ここでは、「家族」とは、便宜的に、寝食を共にする共住集団だけでなく、共住関係にはないが血縁関係にある親族集団をも示す概念と位置づけたうえで分析が進められた。本論文は、また、ソ連解体以後の社会変容と一般大衆の微細な生活営為とを、上記の社会・経済的な階層に属する人々自身の体験にそった視点から捉え、明らかにしたものである。ソ連解体以後の社会変容のなかでも、とくに経済とジェンダーをめぐる変化は、現地住民の「家族」編成に大きな影響を与えるものであり、本論文は、ウズベク人の「家族」をめぐる民族誌的説明に基づいて、ソ連解体以後の社会変容を明らかにするものでもある。</p> <p>本論文は全8章から構成される。第1章は、全体の序論に相当し、研究の目的と本論文の視座が明らかにされる。第2章では、調査地としたサング村の形成と分化の歴史、その変遷が示されるとともに、現在の村落と住民に関する基礎的な情報が概観される。さらに、村落での共同性とその互助的機能の在り方が明らかにされる。</p> <p>第3章では、現代ウズベキスタンの文脈において、いかに家族が相互扶助の実現を目的に組織されているのか、その理念と再生産の営為がサング村の事例から明らかにされる。また、家族がいかに父親または父系の血縁親族をめぐる慣習化された理念モデルを軸として捉えられているのかが解明される。第4章では、相互扶助の枠組みのなかで、人々がどのように集住し、そして日常生活においてどのような他者とどのような関係を結んで暮らしているのかが分析される。その結果、独立後の経済的貧困という社会状況のなかで村落大衆が行う「貧困対処」の具体的な中身が照らし出される。</p> <p>第5章では、道(公共の場所)で共に行動している人々の社会関係と、その空間的近接距離の検討・分析から、彼ら/彼女らの身体遂行次元での親疎関係が考察され、公共の場における空間分離の規律が明らかにされる。また、社会性の求められる道においては、「性」の露呈が禁じられていることが示される一方で、その「性」が一体どのような範囲を有す</p>			

るものであるのかについても、「家族」の観点から分析される。

第6章では、女性たちが日々の暮らしのなかで、いかに主体性をもって生活を営んでいるのかが民族誌的に明らかにされる。また、隔離性の強い伝統的な居住空間である家で過ごす時間が相対的に多い女性が、住居内に居ながらにして、道での社会生活とのつながりを確保している様子が記述される。さらに、そこでは、彼女たちの主体性が村の社会生活においては「噂」という効果的なコミュニケーションにより強力に管理される側面を含むものであることが解明される。

第7章では、首都タシュケントの「乞食」、なかでもウズベク人女性の「乞食」の生活に着目することをとおして、ソ連解体以後のウズベキスタンにおけるセイフティ・ネットが地方村落と都市で異なる形で存在していることが明らかにされる。そこでは、ソ連解体以後再生したイスラームが、都市の匿名性のもとで彼女たちを救済している現状が示される。さらに、独立後の社会的保守主義の時代に生きる女性たちの「貧困対処」の戦略とその家族生活、そして都市的な相互扶助の実態も解明される。

第8章では、以上をまとめた考察が提示される。まず、経済とジェンダーをめぐる変化のもと、ソ連時代には根絶されるべき因習であった家父長制は、今日、文化的な規範の厳格化とともに、生存と相互扶助の基盤となる経済単位として機能する一方で、社会・宗教的な規範を逸脱した女性に対する新たな排除という抑圧形式を導くものとなっていることが指摘される。その反面、この抑圧を原因として、結果的に匿名性の高い都市へと移住した女性の「乞食」たちは、再生したナショナルな文化のひとつであるイスラームに救済されることにより、そこでの生活が可能になるという実態が照射される。つまり、ローカルな地域共同体では、社会・宗教的な規範を逸脱した女性へのセイフティ・ネットは弱いのに対し、匿名性の高い都市では、サダカ（施し・任意の喜捨）という宗教実践によって、彼女たちの生活が可能となっていることが論証される。

このように、ソ連解体以後のウズベク人社会におけるセイフティ・ネットが、農村部と都市部でそれぞれ異なる形で二重に存在していることが明らかにされる。さらに、ここに、ソ連解体以後の現在において、社会・経済的に中間層あるいは下層の「家族」に属する人々が経験しているウズベキスタンの現実のもっとも特徴的な様相が立ち現れると結論づけられる。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、旧ソ連・中央アジアのウズベキスタン共和国において、1980年代末のソヴィエト連邦の解体という大きな社会変容以降に、経済とジェンダーという問題が現地ウズベク人のなかでどのように経験されてきたのかを、社会・経済的な意味で中間層または下層に位置する人々の、「家族」を核とする生活世界をとおして明らかにしたものである。ソ連解体という近年における社会体制の激動は、人類学に対してもさまざまな課題を突きつけてきた。たとえば、社会主義によって作り上げられてきた社会・経済的な保証制度に取って替わる新たなセイフティ・ネットの構築という問題も重要な問題のひとつとして関心を集め、中央アジアのポスト・ソヴィエト社会においては、イスラーム共同体マハッラが相互扶助の機能を果たす一種の福利支援網となりうる事が指摘されてきた経緯がある。

ウズベキスタンにおけるこれまでの研究はマクロな政治や経済を対象とするものがほとんどであり、中央アジア農村部におけるミクロな生活世界を対象とした、長期間の実地調査にもとづく人類学的研究は皆無に近い現状にある。これに対し、本論文は、農村部における延べ28ヶ月間、首都タシケントにおける延べ7ヶ月間におよぶ長期間にわたる実地調査による一次資料の収集をもとに、社会変動後のウズベク人生活世界における「家族」と相互扶助の実態を初めて明らかにした貴重な民族誌的研究であり、ウズベキスタン研究への大きな貢献となるものである。本論文において、評価されるべき点は以下の4点である。

第1に、視点と方法論上の独創性である。これまでマハッラという共同体レベルに焦点が当てられがちであったのに対し、さらに細分化されたハウリという「家族」共同体に着眼し、相互扶助の問題を解明しようとした点である。また、ロシア語、ウズベク語を駆使しての一次資料の収集と分析は周到かつ精密である。公文書や統計などの各種資料の収集と分析、インタビューと日常会話の録音、行動の観察といったフィールドワークの多彩な方法論を駆使するばかりではなく、タイム・サンプリング法による「背景音」の収集、対人距離の計測をもとにした社会的空間分離の実証的データの分析を行った点はきわめて斬新である。とくに、背景音、対人距離への注目は、ロシア・ウズベキスタン全体の先行研究を見渡しても今までに類のない着眼点である。これにより、ウズベキスタン農村部における「家族」を取り巻く生活世界に関する貴重なデータを蓄積しその実態解明をしたことは高く評価される。

第2に、ウズベキスタンはソ連解体後の新しい独立体制のもとで、ソ連時代とは別種の公的イデオロギーのもとで成立している国であるが、まだ拘束や制約の厳しい国柄で

ある。そのため、ウズベキスタン国内では処女性や乞食といった問題領域は学術研究のテーマとはなりえず、むしろタブーとさえされる現状にある。こうした現状にあって、申請者がこのようなテーマに取り組んだことはきわめて果敢な挑戦であり、その勇気と独創性は非常に高い評価に値する。

第3に、首都タシュケントのウズベキスタン女性「乞食」に着眼したことにより、彼女たちの生活世界の実像をとおして、ソ連解体という歴史的イベントが与えた影響を活写している点は大きな成果である。さらに、この記述をとおしてソ連解体以後のセイフティ・ネットが地方村落と都市とでは異なる形で存在していることを照らし出し、「家族」が直面する経済とジェンダー双方の変化を明らかにしたことは重要な達成である。

第4に、ウズベキスタン農村社会における家族と親族に関する理念型を丁寧に解明した点がとくに注目される。これにより、現在のウズベキスタン農村部においてはソ連時代にさんざん喧伝されてきた男女平等論が完全に影をひそめ、イスラームの文脈による男女創造論が流布していることなど、これまでのウズベキスタン研究において明らかにされていなかったウズベキスタン農村社会におけるイデオロギーの実態を明らかにした点で、優れた論攷になっている。

以上、本論文は、ソ連解体以後のウズベキスタンにおける経済とジェンダーの問題を、とくに農村社会における家族と相互扶助に着眼して明らかにした独創的な研究である。ただし、本論文は貴重なデータの蓄積にもとづく個々の事例の提示に留まり、抽象度の高い理論の構築は今後の課題として残されている。同時に、民族誌的先行研究とのさらなる比較検討をもとに、本論文の提示したウズベキスタンの事例の正確な位置づけを行うことが望まれる。また、背景音や対人距離を定量的に分析するという方法論の民族誌的研究に対する有効性をさらに検証する作業が課題として残された。しかし、農村部と都市部でのセイフティ・ネットが異なるというその二重性を明らかにしたこと、ソ連解体以後における社会・経済的中間層あるいは下層の「家族」が経験する現実の諸相を明らかにした点は、文化人類学的研究として高く評価でき、上記の弱点を補って余りあるものである。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年3月5日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降